

論文

英語でのコミュニケーションと日英語の発想の違い — ALT(外国語指導助手)へのサーベイ(調査)結果からの考察 —

井 上 卓
(関西学院大学大学院)

1. 研究の目的

- 1) 異文化理解、特に日英語のコミュニケーション・スタイルの違いを分析考察することによって、今後の英語教育で、ALTとのチームティーチングを始めとしたオーラルコミュニケーション指導に役立てる。
- 2) 文化からくる発想の違い、コミュニケーション・ブレイクダウンの原因等を分析、positive(前向き)でより良好な異文化コミュニケーションへの具体的な手掛けりを探る。

2. 研究方法

- 1) アンケート項目を決定、より率直で自由な回答を得るために項目の順序はわざと無作為にした。質問項目は 17(A の質問 3 つ、B の質問 1 つ、C の質問 13、計 17) :

[質問項目]

- A) 西欧人と日本人とのコミュニケーションの仕方の違いに気付きましたか？気付いていたら、あなたの意見では、その相違は特に何だと思いますか？
 - あなたの意見では、それらの相違はなぜ存在すると思いますか？
 - あなた自身と日本人とのコミュニケーションの相違に関する経験といったものは何でしょうか？
- B) 日本人の同僚との間の communication problems の対話例。communication がブレイクダウン(挫折)することのポイントとその理由をあげて下さい。
- C) あなたは西欧人として、次のようなケースにどう対応するか、あるいはどう解釈しますか？
状況別の質問 ①～⑬ 質問内容の英文は、巻末に添付。

- C の質問項目中には、4 の “We Japanese people…” のように古典的で基本的なものもいくつか入れる。discourse(談話)的な観点より、B では ALT に JTE(日本人英語教師)との communication problem の会話例を挙げてもらう。
- 2) 和歌山県内の 70 名の ALT にサーベイを依頼。35 名の ALT より回答を得る。
Informants の内訳：出身国は、USA(11)、Canada(8)、Australia(7)、New Zealand(3)、UK(4)、Ireland(2)。年令は 22～35 才まで。
 - 3) 内容からみて整理分類する。C の 1～13 は、回答を好意的な受け止め (Positive Acceptance)、否定的な受け止め (Negative Acceptance)、中立的な受け止め (Neutral Acceptance) に分類。

3. ALTへのサーベイ（調査）

A) 西欧人と日本人とのコミュニケーションの仕方の違いに気付きましたか？気付いていたら、あなたの意見では、その相違は特に何だと思いますか？

Aには様々な回答が寄せられたが、項目別に整理して、特に代表的なものをダイコトミーで示した：

表1 Aの回答結果

項目	英語母語話者	日本人
Communication style	Direct style of communication	Indirect style of communication
思考パターン	Don't shy away from confrontation (人の意見の対立を恐れない)	Non-confrontational (意見の対立を恐れる)
レトリック(話し手と聞き手の位置づけ)	よりdirectで、聞き手をどう見るかという点で、話し手に依存する(話し手中心で聞き手を操作)→gap少ない	聞き手により依存(聞き手への配慮が中心)→聞き手が話し手の言葉を聞き、Yes/Noを決める
Upbringing(教育)	自分自身の意見をclearly, directlyに言う幼少時からのしつけ 問題にfaceするようにしつけ	集団の和を尊ぶしつけ 問題にconfrontせず集団の和を乱さないしつけ
Non-verbal(非言語的な部分)	多くのeye contact/gesture silence避ける	ずっと少ないeye contact/little gesture/言葉と言葉の間のsilenceで伝える

[分析] 殆ど全員が、対話スタイルの違いに気づいていると回答。大きな相違に、direct style vs. indirect styleだと答えた人 10/35 (29%)。他の回答も、多かれ少なかれ、この相違に関連。全体として、英語母語話者と日本人の対話スタイルは、正反対と言える程異なることが分かる：母語話者のスタイルは、説得型のダイアログ（対話）で、対照的に、日本人は、モノログ（独り言）型。

○ あなたの意見では、それらの相違はなぜ存在すると思いますか？

表2 コミュニケーションスタイルの相違が存在する理由

項目	英語母語話者	日本人
文化・価値観の違い 20/35 (57%)	the focus on the individual (個人主義) 自己主張は積極的な自信の表れ。強いself-esteem。	the focus on the group (集団主義) 強い自己主張はaggressive。 弱いself-esteem。
社会構造	水平社会 You and I are equal.	タテ社会 hierarchy You are superior to me.
Education	Individuality(個性)の重視	Conformity(調和)の重視
人間関係	ずっと以前に「内」の大部分を失う	「内」と「外」を区別 「身内」と「他人」を区別
地理的要因	お互いから、より独立。	狭い国土に多くの人が、お互いに接近して暮らす。対話でも、他人の感情を害さないよう気を遣う。

[分析] 大部分の人が、違いがあると回答し、特に「文化・価値観の違い」を6割近くの人が挙げて、「個人主義」の西欧と、「集団主義」の日本という基本的な相違に触れた人が多かった。「社会構造」では、水平社会の欧米では、個性と独立心が人間関係に関する価値観で、個性を伸ばす教育の結果、積極的に自己主張する。背後には強い自尊心がある。日本人は、集団の和に重きをおく軽が行われ、対立を避け、自尊心も弱くなる。

- あなた自身と日本人とのコミュニケーションの相違に関する経験といったものは何でしょうか?

Negative Acceptance/Frustrating 21/35 (60%) : 日本人との direct communication ができない。(日本人の personal view が聞けない)

Positive Acceptance 10/35 (29%) : 日本人 (JTE を含む) との communication は、うまくいっている。

Neutral Acceptance 3/35 (8%) : 少少の誤解や失敗はあったものの、JTE との対話はうまくいっている。

その他 1/35 (3%) : 日英語の構造上の違い

[分析] Negative な受け止めの「日本人との direct communication ができない」が6割もある理由は、JTE 等が ALT との対話で、自己主張に慣れず、日本語の発想から相手に気を遣いすぎて Yes/No をはっきり言えない beat around the bush 式スタイルを取るからだと思われる。Positive が 29% とかなり多いが、これは来日当初、異文化に慣れない彼らが、1・2年の内に日本人との対話に慣れて、それ程苦にしなくなつたことを示す。

- B) 日本人の同僚との間の communication problems の対話例。communication がブレイクダウン (挫折) することのポイントとその理由をあげて下さい。

- 1) 回答された対話例を次の5つのタイプに分けて、ALT から寄せられた会話例を次に示した:

表3 5つのタイプの対話例

	特 色
対話のタイプ1	ALTはゲームだけをしに来ていると考えるJTEとの会話。
タイプ2	team-teachingに消極的で、やる気のない先生との会話。
タイプ3	ideaに乏しく、ALTにプラン作りを全部やらせるJTEとの会話。
タイプ4	打ち合わせの時、Yesを連発するが、授業をしてみるとALTの言ったことが全然理解できていないJTEとの会話。
タイプ5	ALTがJTEからイジメに遭ったと思うような会話。

表4 ALT から寄せられた会話例

DIALOG TYPE 1 (何の予告もなしに10分前に来て) JTE : We have class next time. What will we do? ALT: Well, I don't know. (pause) Maybe past tense. (longer pause) But that doesn't matter now, what will we do? (右上へ続く)	ALT: I would like to help you teach them about past tense then. JTE : No, we can't do that. Not enough time. Let's play a game.
DIALOG TYPE 2 JTE : Do shio o ka? (What shall we do?) ALT: (ワークシートを見せながら) I have prepared this worksheet/ game, what do you think? JTE : Hmmmmmm..... How does it work? ALT: (説明する) (右上へ続く)	JTE: Hmm.... How long does it take? ALT: I don't know, I haven't tried it yet. JTE: Hmm.... Have you taught it with another sensei yet? ALT: No, not yet. JTE: Hmm..., Ja, do shio ka? (自問自答している様子) Ja, let's try. ALT: OK. I'll prepare some copies.

<p>DIALOG TYPE 3</p> <p>JTE : What shall we do?</p> <p>ALT: Do you want to use the text or play a game?</p> <p>JTE : Textbook. What shall we do?</p> <p>ALT: What text, and where are you in the text?</p> <p>JTE: Here, what shall we do?</p> <p>ALT: I have not read this yet, give me some time. (silence for 20 minutes)</p> <p>ALT: I have one idea, it will take about 30 minutes.</p> <p>We have 20 minutes left. (右上へ続く)</p>	<p>JTE : What shall we do for remaining times?</p> <p>ALT: Well, let's see. (thinking) Why doesn't she come up with something?"</p> <p>JTE: Read this. (Pointing to questions) Ask students questions. That's all. (5 minutes before class)</p> <p>JTE: Why don't we play a game?</p> <p>ALT: You told me you wanted to use the text!</p>
<p>DIALOG TYPE 4</p> <p>JTE : We have team teaching today-6th period.</p> <p>ALT: Yes. What should we do?</p> <p>JTE : Oh, I have no plans.</p> <p>ALT: OK, then, what did you do with them in the last lesson?</p> <p>JTE : Well, textbook activities.</p> <p>ALT: Should we start with a review?</p> <p>JTE : Please plan something and we'll do that. (右上へ続く)</p>	<p>(Afterwards, during an explanation of the lesson to the JTE, he/she repeats "yes" after my questions to check to see if they understand. It is not until we're in front of the students that I realize the JTE didn't understand what I had explained earlier. I then have to spend class time explaining it to the JTE, or have to execute the lesson without his/her help.)</p>
<p>DIALOG TYPE 5</p> <p>(A) (授業の直前にやって来て)</p> <p>JTE : OK, we have a lesson next period.</p> <p>ALT: What shall we do, then?</p> <p>JTE : Please speak to the students for about 10 minutes in English. (右上へ続く)</p> <p>(B) (普段からALTとの授業を嫌うJTEが)</p> <p>JTE: Please pronounce these words in an American accent for the students to listen to.</p> <p>ALT: But I'm British. I can't speak with an American accent. (右上へ続く)</p>	<p>ALT: What about?</p> <p>JTE: <u>Anything</u> OK. Let's go.</p> <p>ALT: EH???</p> <p>(She knows this teacher hates team-teaching and never plans with her, but she feels she is bullied in this way.)</p> <p>JTE: Try. Or shall I dictate this passage...?</p>

2) コミュニケーション・ブレイクダウンが起こる理由として挙げられたものを整理してみると次のようになる：

- ① JTE の Team teaching への消極的な態度 [40% (14/35)] … (例) 打ち合わせを嫌い、授業の直前にやって来て Anything is okay./What shall I do? とか言う。Lesson plan 作成の責任が ALT にあると考える JTE。ALT がゲームだけをするために来ていると考える JTE。JTE との消極的な言葉のやり取り。
- ② コミュニケーション・スタイルの違い [23% (8/35)] … JTE の Yes、長い間 (pause)、indirect で独り言のような話し方。
- ③ 文化の違い [23% (8/35)]
- ④ 自分の日本語力不足が原因 [11% (4/35)] … 日本人の同僚と対話するのが難しい。
- ⑤ Class discipline (授業の規律) [3% (1/35)] … 授業中の生徒の態度・規律について JTE と考えが違うのが問題。

[分析] ALT は、日本人 (JTE 等) との会話で対話スタイルの大きな相違に戸惑い、不満

を持ちがちである。日本人は他人に気を使いすぎて意志表示がはつきりせず、曖昧で間接的な話し方をする。幼少時から自己主張に慣れ論理的に話を進める欧米人との会話は、言葉の壁もあり、正反対の文化を持つJTEにとって、プレッシャーになりティームティーチングの取り組みも消極的になりがち。個人主義が発達した欧米社会では、お互いの考えが違うのは当然とされ、話し手がメッセージを聞き手にいかに効果的に説得して伝えるかが重視される。一方、单一民族社会で同質性の高い日本では、話し手がはつきり話さなくても相手に察してもらえるという期待(日本人独特の「甘え」の感情)があり、西洋の説得型コミュニケーションが発達しなかった。加えて、日本語自体ファジー(あいまいな)表現、音声的に間を取りやすい、モノローグ(独り言)的という特徴があるので、ALTとの対話でも、これらの日本の発想がJTEに大きく影響して、コミュニケーション・ブレイクダウンの原因となると思われる。

- C) あなたは西欧人として、次のようなケースにどう対応するか、あるいはどう解釈しますか?

次は、状況別の質問1~13への回答結果である。質問内容の英文は、巻末に添付:

表5 質問1~13への回答結果

Case	Negative	Positive	Neutral	その他
① 研究会での日本人。沈黙と型どおりの発言	94% 33/35	3% 1/35	9% 3/35	6% 2/35
② 会議での日本人。自己主張の欠如	34% 12/35	20% 7/35	26% 9/35	
③ 日本人のset phrase。You are tired, aren't you? 集団の和の重視。	29% 10/35	46% 16/35	20% 7/35	
④ We Japanese people… 日本人の集団思考	46% 16/35	9% 3/35	43% 15/35	
⑤ May I borrow Tom/Mary for the evening? 外国人を物扱いするような感覚。	26% 9/35	63% 22/35	6% 2/35	
⑥ Like A Man, Silent and Drink Sapporo Beer (TV commercial) 以心伝心型の対話スタイル	23% 8/35	23% 8/35	14% 5/35	
⑦ 宴会への誘いの押しつけ I'm afraid that you are an unsociable person. 集団の和vs.個人のprivate life	31% 11/35	31% 11/35	17% 6/35	
⑧ 本人のimpolite, rudeな英語の使い方	77% 27/35	3% 1/35	3% 1/35	
⑨ You had better… 英語への直訳表現	23% 8/35	46% 16/35	14% 5/35	
⑩ More rice. 男性上位に見える日本人の家庭	37% 13/35	31% 11/35	11% 4/35	
⑪ ALTに当てられて、直接ALTに答えない日本人学生。自己主張と日本人	57% 20/35	6% 2/35	20% 7/35	
⑫ 友人に勉強していないと言って、テストで良い成績を取る日本人の学生。日本人の謙虚さ。	11% 4/35	66% 23/35	17% 6/35	
⑬ パチンコ好きの同僚の事で冗談を言って、座をしらけさせた。ユーモア感覚の食い違い	29% 10/35	9% 3/35	49% 17/35	

[分析] 質問①: 日本人の態度に対して、大部分のALTから否定的な回答。英語母語話者の発想では、参加者個人の意見を重んじ、誉め言葉だけでなく、批評も期待。②: 批判的意見が多いのは、対立を恐れず自分の意見を言え、という意味。③: 日本人のset phraseは通用しないが、好意的に受け止めた回答も多い。④: 一般的に個人主義

の発達した母語話者には、抵抗が多い。⑤：物扱いされることに否定的な回答がある反面、丁寧表現で理解できるという回答も多い。⑥：男性優越主義への否定回答と、廣告に過ぎない、と理解を示す肯定回答が半々。⑦：参加の強制は、private lifeへの侮辱だ、という否定回答と、和の重視を好意的にとらえる回答とに別れた。契約観念の違いもある。⑧：殆どすべての人が否定回答。英語にも丁寧表現、婉曲表現がある。⑨：強制・恫喝の感じを受ける、と否定回答も多いが、日本語の直訳表現を気にしない回答が多い。⑩：gender issue の視点から、否定回答が多い反面、慣れて気にしないという肯定回答も少なくない。⑪：否定回答が多い。欧米では、一人一人が自分で判断し自分の意見を持つことを重視。⑫：肯定回答が多い（欧米でも、業績を自慢するのを嫌う場合がある）。しかし、欧米には、自分・身内を卑下することはない。⑬：同様のことはどの国でも起こり得るから、話題を変えるか謝るかする、という中立回答が多い。同様の失敗をしてショックを受けたという否定回答も多い。ユーモア感覚の違いに触れた回答も。

4. 考察

4.1. Direct style vs. Indirect style

サーベイ（調査）の結果、英語母語話者と日本人の対話スタイルの大きな相違が明らかになった。Direct style 対 indirect style である。英語母語話者はポイントをはっきりさせて直接的に論理的に話す。一方、日本人はポイントを明瞭にせず、間接的で曖昧な話し方を好むということである。この相違が生まれた理由として、西洋では、約 2300 年前にアリストテレスが「弁論術」を著したように、話し手が聞き手を効果的に説得するコミュニケーションの技術（レトリックあるいは修辞学）が発達してきた。その流れを受けて、欧米では人々は自分の考えを明確に論理的に述べて相手を説得しようとする。一方、狭い国土に多くの人間がひしめき合う日本では、お互いを怒らせないように気を使うので、曖昧な話し方をして「察し・思いやり」のコミュニケーションを行う能力が重視されてきたからと考えられる。

このように正反対の発想法をもつ人々の対話には、色んな行き違いや誤解が生じる。次に、筆者が収集した、日本人と英語母語話者との実際の会話例を挙げてみたい：

- (1) American: Why do you like to study English?
 Japanese: Well … (沈黙) … I went to Mr. Smith's house last evening.
 American: ?? You did?
 Japanese: Yes, he is my friend. He is very kind to me. We had a party there. Do you like a party?
 American: ?? Yes, I do.
 Japanese: I speak English and I can make many foreign friends. It is fun to speak English with them.

(1) で、アメリカ人が始めに期待した答えは Because it is fun to speak English and I can make many foreign friends. のようなものだろう。しかし日本人は問われていることに直接答えないで周辺部の説明から始め、最後にやっと回答を述べている。つまり相手が結論を察してくれることを期待する表現スタイルを取っている。二人の会話はかみ合わず、ア

メリカ人は相手が何を言っているのか見当がつかずイライラすることになる。

(2) (北朝鮮のミサイル発射実験が行われたことについて)

American: Do you think a missile defense system is necessary?

Japanese: Well . . . (沈黙) . . . We Japanese people have a Constitution that prohibits us from having armaments.

American: Uh-huh? Do you think defense system is necessary or not?

Japanese: We have the Constitution. So it is very difficult.

American: ??? (What does he/she mean? Get to the point!)

(2) で、アメリカ人が期待した答えは、Yes, I think it's necessary. Because we have possible threats from long-range missiles. あるいは No, I don't think it's necessary. Because I think Japan is safe from such missile attacks. 等だろう。ところが日本人は Yes か No のいずれかを決断して答えないで周辺部の事情から遠回しに答えている。日本人同士なら、言外の意味を読み取ってお互いの言わんとする所を察知して対話が進むだろう。しかし一般的に欧米人にとって日本人のこのような間接的な対話スタイルは我慢がならない。よく欧米人があいまいな言い方をする相手に Don't beat around the bush. とか Get to the point. と言うのはこのためである。Do you ~ ? の質問に対して Yes / No で答えることは誰でも学校で習って知っている。ところが実際の対話の場では、日本の発想が影響して上の例の様なやり取りにおちいるケースが多い。

文化によって発想法は大きく異なると言われる：英語母語話者と（日本人を含む）東洋人のレトリックの違いは、次の図を見ると理解し易い：

表6 Kaplan (1966: 15)

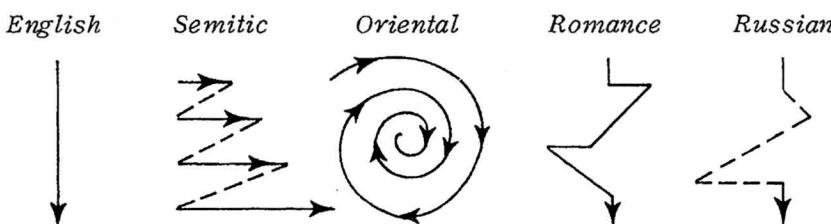


表6のように、英語は、まず結論をすばりと言つてから、裏付けになる理由を論理的に説明していく話の展開の仕方 (General-to-Specific discourse pattern) を取る。一方、日本語は、渦巻き状に周りからいろいろ状況を説明して、相手を話に (できるだけ情緒的に) 卷き込んで、中心部 (核心部) にもっていくやり方 (Specific-to-General discourse pattern) を取る。このように、直線的な英語の思考型に対して、日本語のそれは渦巻き型であるとも考えられる。ALTと日本人 (JTEを含めて) の対話がうまくいかないケースが多いのは、ALTが話のテーマの核心に一直線に迫るのに対して、JTEは核心に至るまで前置きが長く、話のポイントが曖昧で堂々巡りしがちであるからと考えられる。こういったことから、英語母語話者との異文化コミュニケーションで、日本人は曖昧な渦巻き型スタイルよりも明確な直線型のスタイルを用いた方がいいと思う。

Kaplan (1966) の説明は、日英語のレトリックの比較等で、長く重みを持ってきた。しかし、Hinds (1983) によれば、批判すべき点もある：①データの集め方に問題（英語を専攻する外国の学生に、彼らの母語でなく英語で作文を書かせて、分析した）②Oriental という包括的な分け方に問題（図8で、Oriental は、Chinese、Korean を含むが Japanese を除外した）③英語を直線で表すのは、必ずしも正確とは言えない。例えば、Cheng (1982) によれば、英作文のレトリックは、基本テーマを中心とした一連の同心円で最も適切に表される。実際、Hinds (1983) は、日本語レトリックの特徴は「起承転結」であると主張しており、渦巻き状の図が最適とは限らないと思える。また、英語母語話者でも、ストレートな言い方よりも、真綿で首を絞めるような遠回しな言い方をする場合もあるので、彼らのレトリックの型を直線で表すのは、一般化し過ぎの恐れがあるように思われる。

4.2. 英語にも敬語がある——英語母語話者は tact を用いる

C の質問項目8）のように、英語は直接的な言葉だから何でも率直に言える、と思っている日本人がとても多い。これに対して、多くの ALT が、英語にも丁寧表現・婉曲表現があり、formal な表現と informal な表現を使い分けていると回答した。このサーベイの結果、英語にも敬語があるということ、また敬語と言っても、日英語間で大きな違いがあることも明らかになった。

タテ社会の日本では、人々はお互いに You are superior to me. というポーズを取り、謙譲表現のような形式的な敬語が発達してきた。一方、ヨコ社会の英語文化圏の敬語感覚は、目上とか目下とかいった、日本のようなタテ社会の敬語感覚とはかなり異なる。キリスト教の欧米では、唯一絶対神のもと人は平等に造られている意識、お互いを個人として尊重する意識が強い。こういう個人主義の文化では押しつけを嫌うので、相手の自由意志を尊重し相手に選択の余地を残す表現を使うことが大切である。

このような表現の例をいくつか挙げてみたい。我が家を訪れた外国の客をドライブに誘う時、Let's go for a drive. と言うと押しつけになるので、Would you like to go for a drive? と言う方がいい。これを How would you like to go for a drive? と言うと更に相手の気持ちを尊重した言い方になる。JTE が ALT に I want to ask you a few question. と言うのをよく聞く。これは同僚同士でも I'd like to ask you a few questions. と言うべきである。あるいは、Will you tell me how to teach this material? と ALT に言ったとする。これは Would you please tell me how to teach ~? と言うべきである。Will you ~? は「～してくれませんか」で丁寧な表現だと学校で習う。ところが Will you ~? は会社で上役が秘書にものを頼むような「指示」か「命令」の響きがあるので注意が必要である。会社でも上役は部下に Will you ~? と言わずに Would you please ~? と言わなければならない。

今回のサーベイで、何名かの ALT からの次のような指摘があった：「英語は確かに率直な言語だ。それゆえに人々は相手の自由意志や感情に心配りする必要がある。人々は tact (機転・配慮) を用いる」。さもないと、相手に不作法で不愉快な人物だと取られる恐れがある、という。ここでいう tact は、日本人には聞き慣れないが、欧米人にはよく知られた言葉である。tact の定義は、「如才なさ、臨機応変の才、機転」[ユース] とある。欧米の書店の店頭には、tact 関係の書籍が多く並んでいる。例えば、その一つは、What is tact? の説明を次のように述べている：

- (3) Tact is the ability to recognize the delicacy of a situation and then to say the

most considerate or most appropriate thing. Tact requires a sensitivity to others, combined with the skill to speak assertively at any given time without giving offense. [Gabor Don 1994]

このように、tact というのは、言いにくいことをソフトにうまく（カドをたてずに）伝える方法であることがわかる。

以上、見てきたように、一見フランクに話し合っている欧米人は、言葉の使い方についてはデリケートであることがわかる。英語母語話者の敬語感覚は、縦社会の日本の敬語感覚とかなり異なる面もあるが、お互に思いやりを示すという点で共通する部分も多い。

4.3. 発想の転換を——言挙げと自己開示

サーベイ（調査）の結果、英語母語話者は、積極的で自己主張型の対話スタイルを取るが、一方、日本人は、モノローグ（独り言）的で、曖昧で相手に伝わりにくい対話スタイルを取ることが明らかになった。ALT で、日本人（JTE を含む）との対話に強い不満を持つケースが多いのは、このためである。

ここで、言葉と文化という観点から考えてみたい。日本人の寡黙好みについては、日本人の言葉への見方が大きく関係していると言われる。日本には古くから言霊信仰があり、ものを言ったり書いたりすると、災いの元になるというのである。「口は災いの元」「物言えば唇寒し」等の諺があるように、日本の文化は長く「語らぬ文化（言あげしない文化）」だった。しかし、異文化の人々相手のコミュニケーションでは、こんな事は言っておられなくなる。次の万葉集の柿本人麻呂の一首を見てみたい：

- (5) 葦原の瑞穂の国は神ながら事挙げせぬ国／しかれども言挙げぞ我がする言幸く／
 ま幸くいませと障みなく幸くいまさば／荒磯波ありても見むと百重波千重波にし
 き／言挙げす我れは 言挙げす我れは [3253] [伊藤 1997]

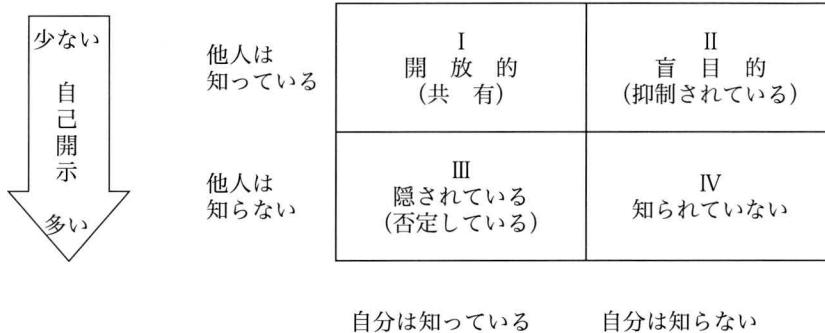
(5)は、遣唐使を送る際に詠まれた詩で、これから唐という国に渡って異文化コミュニケーションを行うことへの、人麻呂達日本人の決意・気概が感じられる。しかし、人麻呂の時代から約1200年経った今日、日本人にとって異文化コミュニケーションの課題は変わったのだろうか。項目Cの(1)のように、研究会等で、「何か質問(意見)は」と言われても人々はいつまでも沈黙を続ける現象が、今日でも至る所で見受けられる。「言挙げしない」文化に育った日本人にとって、先ずコトアゲをしようという決意が必要だと思う。項目Aの分析で述べたように、日本語は本質的にモノログ言語なので、それからダイアログ言語への発想の転換が、特に英語等を使った異文化コミュニケーションで必要である。

今日、英語教育で Oral Communication の必要性が叫ばれて久しい。コミュニケーションとは、言葉のキャッチボールだと言われる。話し手と聞き手がことばというボールを投げ合いで会話を楽しむのである。しかし、このコミュニケーションに不得手か慣れていない日本人がとても多い。これには日本語のモノローグ性が大きく関係している。日本人の対話スタイルでは、相手構わず独白的に形式的に喋ればそれで済むからである。会話を楽しむと言うことは、お互いに心をオープンに開いて言葉を交わすことなのだが、日本人はこれに慣れていない。次に、会話での自己表現について考えてみたい。

自己開示という言葉がある。これは心理学やカウンセリングだけでなく、異文化間コミュニケーション

ユニケーションでも用いられる。自己を disclose すること、つまり自分の意見・趣味・興味・個人的な悩み等を他人に打ち明けることである。バーンランド (1975) によれば、対人関係の対話でアメリカ人の方が日本人よりも自己開示が大きい。バーンランドは、次のように、ジョハリの窓 (1955) を用いて、日本人は自己表現が消極的で考え方や感情などプライベートなことをあまり話さない。一方、アメリカ人は色々な話題について積極的に自己表現をする、と述べている：

表7 ジョハリの窓 (1955)



ジョハリの窓には、4つの枠があり、「開放的（共有）」の第 I 枠は、己について自分も他人も知っている部分である。この枠は、相手が誰かによって、大きさが変化する、つまり、自己開示度に応じて、IIIの区画の方へ広がったり、また逆に狭まったりするのである。古田 (1987: 107) によれば、西洋のコミュニケーション理論では、他者に自己をなるべく開放して第 I 枠を第 III 枠の方向へ広げることが理想だとされている。

英語母語話者は、一般的に、よく喋り会話を楽しむ風が強い。彼らはお互い対等の関係で、オープンに心を開いて会話を楽しむ。一方、伝統的に「遠慮と察しのコミュニケーション」に頼る日本人は、今日でも、会話で、人との対等感を持つことや心を開くことの大切さに気づいていない人が多い。タテ社会の日本では、人々は「こんな事を言うと相手に失礼では」「こんな事を言うと（目下の）相手に格好がつかなくなる」という風に絶えず意識身構えて、会話を楽しむどころではなくなる。英語等を含めた異文化コミュニケーションでは、人間の対等感を持ち、心を開いて会話を共に楽しむことが第一条件だと思う。

心を開いて会話を楽しむようになると冗談やユーモアも言ったりして、お互いに積極的な表現を多く使うことになる。事実、欧米人の言葉の発想は非常に積極的である。例えば、How are you? と挨拶されたら少々具合が悪くても Pretty good. と答えたり、Your daughter is nice. とほめられたら、日本人のように謙遜しないで Thank you, I'm proud of her. と言ったりする。一方、日本語には消極的・否定的な表現が多い。例えば、「何か質問はございませんか」これを日本人は Don't you have any questions? と直訳して言いがちで、相手は気を悪くしてしまうだろう。これは否定形の質問が丁寧になるという日本語の発想からくる誤りで、ストレートに Do you have any questions? と言うべきである。質問項目Bの2で、コミュニケーション・ブレイクダウンが起こる理由に JTE との消極的な言葉のやり取りが挙げられているが、例えば Team-teaching の打ち合わせの時、ALTからの提案に JTE が It is impossible. I don't think it'll work. と言えば impossible や don't のような言葉は消極的・否定的な言葉なので、JTE は上のように言う代わりに I think your idea is

good, but its level is too high for the students. How about keeping it for some other time? のように、肯定的に言う方がいい。英語はそれ自体エネルギーな言葉で、力強い積極的な表現を好む。集団主義の日本では、お互いに遠慮しすぎて事なき主義になってしまっている。そのため日本語には消極的・否定的な言葉づかいが多いのだが、異文化コミュニケーションではそういったマイナスイメージの言葉は相手に誤解や偏見を持たせてしまう恐れがある。それで英語を話す時は発想の転換をして消極的・否定的な言葉の代わりに積極的・肯定的な言葉を使い素直に好意や善意を表すことが必要だと思う。

4.4. 私達は自分が見えると思うものしか見ない

サピア・ウォーフの弱い仮説に、「母語が話者の考え方へ影響を及ぼす」とあるが、これは、私達は自国語でものを考えるものを見ているが、私達が見ているのは、母国語というスクリーンに映った世界、つまり母国語によって切り取られた世界であることが多い、ということである。私達は自分の先入観から自分の見るもの・聞くものが固定化されていて、それ以外のものは見ようとしないし見えない。実際、今回のサーベイで、「周りの日本人は、自分という人間をまったく知らない」というALTの意見が数多くあった。これは、日本の学校で、ALTの数が増えても、JTEを含め日本人で彼らと十分に対話して彼らの考え方や文化を理解する人は僅かだということを示している。外人さんだから日本人の考え方は通用しないだろう、とALTとのトラブルを恐れ、特別扱いして、出来るだけ関わりを避けようとするケースが多い。こういう事なき主義の反面、「あのアメリカ青年は礼儀正しいから、考え方も日本人と同じだろう」とか、「あの外人の女の先生は若いから、自分の娘のように世話を守ってあげねば」などと、ALTを日本人のように考え扱いがちである。これは、日本人ならこうするだろう、という文化的期待でものを見ているので、実は見えていない。ALTを対象としたこのサーベイ結果から、英語圏は、日本人には強烈に思える個人主義の国であり、一人一人が確固とした個性と独立心を持った人々であることが明らかになった。対照的に、集団主義に慣れた日本人は、協調性と和を重んじてきた。こうした日本人の相互依存は、それなりに美点もあるが、冷徹に見えるほど個性(自我)の確立した欧米人にとっては、お節介・プライバシーの侵害と映ることが多い。実際、若い女性のALTで、周りの日本人が自分の娘のように世話を焼きたがるので、ALTが迷惑し、Musume syndrome(娘症候群)という言葉も生まれている。JETプログラムのもとで行われてきたALTの招聘自体、日本の学校の国際化に少なからず寄与してきたのは、事実である。しかし、ここで述べたように、「国際化」や「グローバル」といった耳に心地よい言葉が飛び交う今日、私達には実は見えてないことが多いのも事実である。

5. おわりに

今回のサーベイへの取り組みを通して、英語のコミュニケーション・スタイルや英語母語話者のものの考え方、価値観等が明らかになっただけでなく、私自身、日本語の特性や日本人特有のものの見方・考え方へ気づき認識するようになった。異文化は自国の文化を学ぶ鏡と言われるが、その事の意味を実感した。発想も対話スタイルも日本人と大きく異なる英語母語話者相手のコミュニケーションでは、ブレイクダウンが起こりやすい。最近、多くの企業が異文化トレーニングを行うように、英語母語話者と日本人が、お互いの異なるコミュニケーション・スタイルを理解するように努めれば、異文化摩擦はグンと減るに違いない。このサーベイ結果が、ALTとJTE間のより良いコミュニケーション作りに、

また英語教育全般に役立つことを願う。今後の課題としては、JTE が欧米人の対話スタイルをどう解釈しているかを知るために、JTEへのサービスを実施する必要がある。また今回参考にした Kaplan (1966) の論文などには問題点もあるので、日英語コミュニケーションの研究を、更に深める必要がある。

References

- Gabor, D. (1994). *Speaking your mind in 101 difficult situations*. New York: Simon & Schuster.
- Hinds, J. (1983). Contrastive rhetoric: Japanese and English. *Text*, 3(2), 183-196.
- Kaplan, R. B. (1966). Cultural thought patterns in intercultural education. *Language Learning*, 16 (1) , 1-20.
- Luft, J., & Ingham, H. (1955) . The Johari Window, A graphic model of interpersonal awareness. Los Angles: University of California Extension Office.
- Naotsuka, R., Sakamoto, N. et al. (Eds.). (1981). *Mutual understanding of different cultures*. Tokyo: Taishukan.
- Ramsey, S. (1998) . Interactions between North Americans and Japanese: considerations of communication style. In M. Bennett. (Ed.), *Basic concepts of intercultural communication*. (pp. 111-130). Yarmouth, Me: Intercultural Press.
- 上地安貞 (1991). 『英語の人間関係学』. 東京：ぎょうせい.
- 伊藤 博 (1997). 『萬葉集釈注』七. 東京：集英社.
- 佐野政之 (1995). 『異文化理解のストラテジー—— 50 の文化的トピックを視点にして』. 東京:大修館.
- 須田紀子 (2003). 「日米のコミュニケーション・スタイル」. 昭和女子大学紀要『学苑』. 第 759 号、89-102.
- 脇山 怜 (1990). 『英語表現のトレーニング——ポライト・イングリッシュのすすめ』. 東京：講談社.
- 土居健郎 (1971), 『「甘え」の構造』. 東京：弘文堂.
- 直塚玲子 (1980). 『欧米人が沈黙するとき——異文化間のコミュニケーション』. 東京：大修館.
- 西田ひろ子 (1989). 『実例で見る日米コミュニケーションギャップ』. 東京：大修館.
- バーンランド D. C. (1973). 『日本人の表現構造』. 東京：サイマル出版会.
- 古田暁監修、石井敏・岡部朗一・久米昭元. (1987). 『異文化コミュニケーション』. 東京：有斐閣.
- 萬戸克憲 (1988). 『外国人講師との授業』. 東京：大修館.
- 山岸勝榮 (1995). 『日英言語文化論考』. 東京：こびあん書房.
- 吉田研作 (1995). 『外国人とわかりあう英語. ——異文化の壁をこえて』. 東京：筑摩書房.
- 和田 稔 (1991). 『国際交流の狭間で——英語教育と異文化理解』. 東京：研究社.

Dictionary

『ユースプログレッシブ英和辞典 初版』(2004) 小学館

C) あなたは西欧人として、次のようなケースにどう対応するか、あるいはどう解釈しますか？

- ① In a workshop after a brief team-teaching demonstration, the audience composed of JTEs, is requested to make comments about the demonstration that they had just witnessed. After a long, uncomfortable period of silence, a JTE blurts out “Thank-you very much for such a wonderful demonstration. Thanks to this demonstration, we could all brush on our English to become much better English speakers. That’s all.”
- ② In a conference, your Japanese friend doesn’t agree with one very loud participant’s opinion. Your friend doesn’t try to challenge the other person, but simply tells the group the following Japanese proverb. “You know, out of the mouth comes evil.”
- ③ Your Japanese colleagues often say to you, “You are tired, aren’t you?”
- ④ When you ask a Japanese what his individual opinion about a topic is, he routinely begins his reply with “We Japanese people...”
- ⑤ You are a 24-year-old foreign student staying with a Japanese family. Some Japanese friends have invited you out for an evening. Much to your amazement, when your friends arrive at the your host family’s home to pick you up, they ask the members of the host family for permission to “borrow you for the evening”
- ⑥ Sapporo Beer used the following slogan in a popular television commercial in Japan: “Like A Man, Silent and Drink Sapporo Beer.”
- ⑦ For various reasons, you seldom accept invitations to work-related drinking parties. One day, a Japanese colleague says to you, “I’m afraid that you are an unsociable person. Try to get along well with the other people by joining the enkais.”
- ⑧ A Japanese colleague always comes across extremely forward and rude when he speaks to you in English. During a conversation one day, he says “I feel most relaxed when I speak English. Because English is a frank and straight forward language, I can say anything I want.”
- ⑨ When talking with your supervisor about where you will meet one another at a conference, smiling, she says to you, “You had better meet me in the lobby at 4 o’clock.”
- ⑩ During a dinner at the house of an always friendly and extremely polite colleague, he hands his rice bowl to his wife saying, “More rice.” She immediately takes his bowl to fetch him more rice.
- ⑪ In a high school English class, you, the ALT, ask a student his name. The student starts talking to his friends around him instead of answering your question.
- ⑫ You are a foreign student at a Japanese college, and prior to a term exam, you ask your good friend Emi if she studied hard for the exam. She replies that no, she didn’t study hard at all for the test, but when the test are returned, you are amazed to find out that Emi had an extremely good grade on the exam, due wholly to the hours she spent studying.
- ⑬ During a conversation with some colleagues that you get on with very well, you make a good-natured joke about the fact that one of your colleagues enjoys playing Pachinko, but for some reason, no ones laugh at your humour, your colleagues become visibly uncomfortable and the conversation suddenly becomes sullen.